

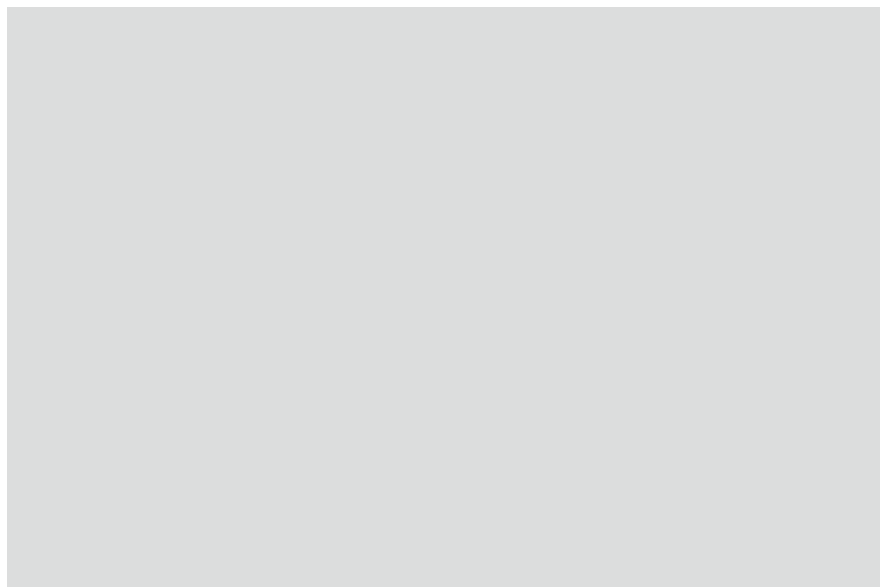
終える命、

つなぐいのち

國森
康弘

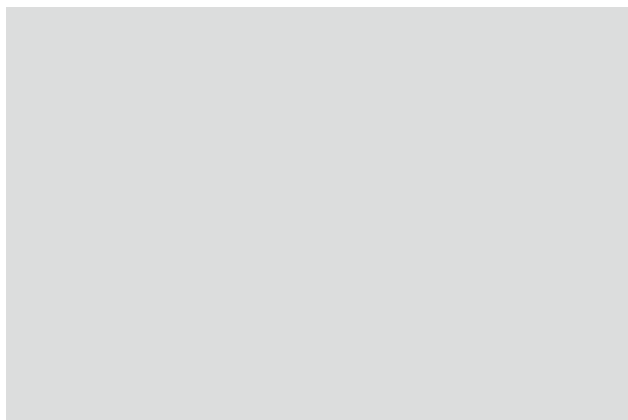
第15回 路上で生きるということ

※本連載は、本文のみ無料でお読みいただけます。
写真は、冊子版でのみご覧いただけます。



1989年度には200万人近い日雇い求人数を誇り、北海道から沖縄まで各地の屈強な労働者を吸い寄せた

でも、
近頃はめつきり仕事が減った





路上で亡くなった人、
看取られなかった人たちが、
「無縁仏」に……

国

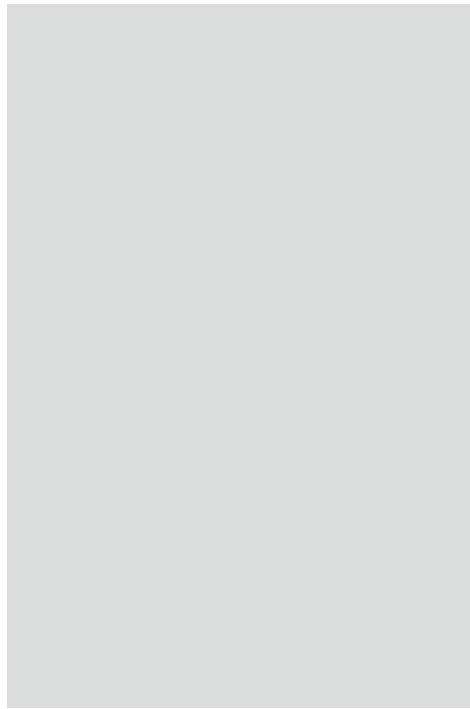
外の紛争地や経済困難地域を訪れる一方で、大阪・釜ヶ崎や東京・山谷を歩いた。紛争の激しかった南スーダンやソマリアの

平均寿命は50歳前後。日本では男性も80歳を超えるなど世界一の長寿国を誇っているが、大阪市西成区の男性平均寿命は70歳そこそこ、なかでも野宿生活者や日雇い労働者が多く暮らす釜ヶ崎では60歳台という。

雨の夜長に路上で眠る人。酒の空き瓶を転がして、昼間に行き倒れている人。血を流して、失神している人……。筆者も何度か、救急車を呼んだ。病氣や栄養失調、寒さによって、路上で死ぬ人が後を絶たない。大阪市内だけで200人あまりが道端で亡くなった年も。ある意味、死がすぐ隣に控えているような、張り詰めた感のある場もあった。

来日して路上生活の現状を目の当たりにしたマザー・テレサ氏が「国外への援助より、日本で困っている人にまず手を差し伸べてください」と言ったこと。紛争地や困窮地域でよく見かけた国際人道支援団体「国境なき医師団」が釜ヶ崎で一時期、支援活動を行なったこと。それらを後に知った。

筆者はときどき、公園のテントに寝泊まりさせてもらった。氷点下の夜中、毛布を何重に巻いても、隙間



から冷気が忍び込んで、体を凍らせる。ほとんど眠れなかった。ある日、知り合ったモリタさんの仕事に同行させてもらう。未明の暗がりにつき出し、空き缶収集日に当たる隣町に、自転車で向かった。網の目のような細い路地を縫うように走り、道の両脇に置かれたごみ袋に目を凝らす。いくつか通り過ぎた後、自転車を止め、素早く1つのごみ袋を開ける。空き缶数個を取り出し、袋は丁寧に閉じてから、持参したビニールに缶を入れた。このくり返し。夜が明けて、雪が舞うなか、ようやく拠点の公園に戻る。休む間もなく、空き缶をすべてブロック片で小さくつぶした。

空き缶は数少ない収入源のひとつだ。この日の収穫は3キロほど、リサイクル業者に持ち込んで450円。時給では100円にも満たない重労働だった。今日では空き缶の換金率はさらに低い。57歳になるモリタさんは「まともな仕事がほしい。働いて、自分で飯を食べたい」と話す。

耳を澄ませば、建設業を中心に「便利な日雇い労働力」として何十年もの間、現場で汗を流し、わが国の高度経済成長を支え、縁の下の力持ちだった方々の声が聴こえる。

〈2008年撮影〉

くにもりやすひろ●写真家。イラク戦争を機に新聞社から独立し、紛争地や貧困地域などの現実を伝えてきた。2008年から日本の「在宅看取り」の現場を撮り始める。写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』シリーズ（農文協）ほか。